

講義科目名称	英語学 II	副題	English Semantics
英文科目名称	English Linguistics Studies II		

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
後期	1・2	2単位	必修選択
担当教員			
細井 洋伸			

英語コミュニケーション	講義
添付ファイル	

授業種類	<input type="checkbox"/> 実務経験のある教員等による授業科目 <input checked="" type="checkbox"/> 実務経験のある教員による授業科目 <input type="checkbox"/> 実務家を招へいして実施する授業科目 実務経験・授業での活用、招へいする実務家等 授業で使用する言語 <input type="checkbox"/> 日本語 <input checked="" type="checkbox"/> 英語 <input type="checkbox"/> その他 アクティブラーニング <input checked="" type="checkbox"/> アクティブラーニング要素を取り入れている
授業の内容(概要)	この授業では、意味論に必要とされる基本的概念について、特に形式意味論の観点から、英語を例に取り上げて考えていく。具体的には、単語や文に関係する意味、デンス、モダリティ、さらには、命題論理、述語論理にも少し触れていく。授業形式は、反転授業の形式を取り、自宅で予習してきた新たな学習内容を、課題シートなども利用しながら、受講者相互で議論を行ったり、教員を含めた議論を行うなど、双方向あるいは多方向に行われる議論を通して内容を深く理解していく。(上記「授業種類」に記載されているように、この授業は「実務家教員」による授業である。)
授業の目的	このコースは、英語でのコミュニケーションに関する研究の基礎となる意味論に関して、その基礎について、議論を通して深く理解する。具体的には、特に形式意味論の観点から意味について考えていく。あわせて、これまでの理論的な考え方について考察し、課題を見つけ出す力を養う。国際コミュニケーション研究科の定めるDP1とDP3の達成に關与している。
到達目標	「形式意味論」の基本的概念を習得することにより、コミュニケーションで使われる英語の表現についての理解を深めることができ、より正確に、しかも適切に英語の表現を使うことができるようになる。また、受講者相互の議論や教員も含めた議論を通して、これまでの理論的な考え方について考察し、課題を見つけ出す力をつける。
授業計画	<p>第1回 <b>イントロダクション</b>          コースの概要を説明し、それぞれの回の授業の概要から、どのような問題が議論の対象となってくるかについて、まずは学生相互で議論し、その後教員を含めて議論をする。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第2回 <b>Meaning, Thought, and Reality: Reference as a Theory of Meaning.</b>          言語の意味は指示的な意味 (reference) という考え方から言語の様々な意味について考え、その考え方の問題点などを考えていく。授業では、まずは学生相互で議論し、その後教員を含めて議論をする。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第3回 <b>Word Meaning (Homonymy, Polysemy, Synonymy)</b>          この授業では、語の意味関係のうち、特にHomonymy (同音異義)、Polysemy (多義性)、Synonymy (同義) に関して、それぞれの概念について考えていく。授業では、まずは学生相互で議論し、その後教員を含めて議論をする。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第4回 <b>Word Meaning (Opposites, Hyponymy, Meronymy)</b>          この授業では、語の意味関係のうち、特にOpposites (反意語)、Hyponymy (包摂関係)、Meronymy (部分・全体関係) に関して考えていく。授業では、まずは学生相互で議論し、その後教員を含めて議論をする。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第5回 <b>Logic and Truth (1): Negation and Conjunction</b>          コースの概要を説明し、それぞれの回の授業の概要から、どのような問題が議論の対象となってくるかについて、まずは学生相互で議論し、その後教員を含めて議論をする。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第6回 <b>Logic and Truth (2): Disjunction and Material Implication</b>          前回に続きPropositional Logic (命題論理) について話し合っていくが、この授業では特に、Disjunction (選言) と Material Implication (実質的含意) について、特に私達が日常使っている自然言語の意味と比較しながら議論をしていく。授業では、まずは学生相互で議論し、その後教員を含めて議論をする。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第7回 <b>Presupposition and Entailment</b>          発話には、話者がその発話以前に聞き手にも知られていると見なしているような情報がある。Entailment (伴立) と Presupposition (前提) は、そのような情報の異なるタイプのものである。この授業では、その Entailment (伴立) と Presupposition (前提) について考えていく。授業では、まずは学生相互で議論し、その後教員を含めて議論をする。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第8回 <b>Predicate Logic (1)</b>          第6回と第7回の授業で議論した Propositional Logic (命題論理) は、自然言語の現象を扱うではいろいろな問題点が生じる。この授業では、どのような問題が生じるのか、また述語論理 (Predicate Logic) では、その問題がどのように解決されるのかについて考えていく。授業では、まずは学生相互で議論し、その後教員を含めて議論をする。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第9回 <b>Predicate Logic (2)</b>          この授業では第8回に引き続き、述語論理 (Predicate Logic) について考えていく。そんな中でも、特に every や some のような量量子を含む文の意味について考えていく。授業では、まずは学生相互で議論し、その後教員を含めて議論をする。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第10回 <b>Sentence Semantics: Classifying Situations</b>          この授業では、述語となる語や句にどのような状況タイプ (situation type) があるのか、また、そのような状況タイプを区別するには、どのようなテストがあるのかについても考えていく。授業では、まずは学生相互で議論し、その後教員を含めて議論をする。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第11回 <b>Ch 8 Pragmatics: Presupposition</b>          話し手は発話をする際、発話以前に事実だと想定していることがあり、そのような情報に基づいて私達のコミュニケーションは成り立っている。そのような presupposition の種類、特徴について、また、実際の会話でそのような特徴がどこまで当てはまっているのか、どんな問題が生じるのかについて、学生相互で議論し、その後教員を含めて議論をする。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第12回 <b>Ch 8 Pragmatics: Grice's Cooperative Principle and the Conversational Maxims</b>          私達がコミュニケーションを行う時に暗黙のうちに従っているとされている Grice's Cooperative Principle と the Conversational Maxims の種類、特徴を確認し、また、実際の私達のコミュニケーションの中でどのように Conversational Implicature が使われているか、英語と日本の間に何か違いはあるのかを、学生相互で議論し、その後教員を含めて議論をする。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第13回 <b>Ch 8 Pragmatics: Conversational Implicature</b>          私達の会話は、文字通りの意味以外に、表面には出てこない含意を持ちうる。そのような Conversational Implicature の特徴、様々な種類について、また実際の私達のコミュニケーションの中で、どのように Conversational Implicature が使用されているのか、英語と日本の間に何か違いはあるのかについて、学生相互で議論し、その後教員を含めて議論をする。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第14回 <b>Ch 8 Pragmatics: Speech Act</b>          言葉は、情報伝えるだけでなく、行為を行うこともできる。そのような Speech Act とはどのような特徴があるのか、また英語のコミュニケーションにおける Speech Act と日本語のコミュニケーションにおける Speech Act の間にどのような違いがあるのかについて、学生相互で議論し、その後教員を含めて議論をする。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第15回 <b>レポートの発表</b>          授業でやったことや感じたこと、特に関心があることについてレポートにまとめてもらい、それを発表してもらい、それを発表してもらい、また、その内容について授業で議論していく。(実務家教員による授業、双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p>

テキスト	<i>An Introduction to English Semantics and Pragmatics</i> . (Patrick Griffiths) Edinburgh University Press.
テキスト購入方法	授業中に指示する。
参考文献	授業中に指示する。
成績評価の方法	プレゼンテーション50%、学期末レポート50%
教員への連絡方法	授業の前後の時間を利用する。
履修上の注意	英語で授業を行う。
授業外学修情報（予習復習）	事前学習：テキストの予定箇所、参考文献について、事前にしっかり読み込んでおく。 事後学習：授業で学んだことを復習し、理解を深める。 1学期の授業外学修時間：合計30時間（1回の授業にあたり合計約2時間の予習・復習）
学生へのメッセージ	毎時間、テキストで事前に指示されたところを読み込んでおく。